「ニ」の意味役割についての素描

菅井　三実

0. はじめに

本稿の目的は、現代日本語の「ニ格」に認められる多様な用法を包括的に考察し、意味的な観点から「ニ格」の全体像を特徴づけることにある。第１節で空間の「ニ格」が程度差をもちながらも一元化されることを示し、第２節で非空間次元においても同様の原理によって整理できることを見る。第３節では「カラ格」と交替する「ニ格」について分析を加えたい。

1. 意味役割の概要と空間領域の多様性

第１節では「ニ格」の意味役割を概観し、機能的な修飾関係を確認する。

与格の意味役割は極めて多様であって、実際、いくつの意味役割を設定するかに関してさえ見解は一致していない[(1)]。本稿では、体系的な整理を見越し、次のように都合14の用法を設定しておくことにする。

(1)(a)　建物全体が西に傾く。　［方向］
　(b)　先生が教室に来た。　［到着点］
　(c)　壁にペンキを塗る。　［密着点］
　(d)　コーヒーに砂糖を入れる。　［収斂先］
　(e)　研究室に学生がいる。　［存在点］

(2)(a)　花子を食事に誘った。　［目的］
　(b)　子供に英語を教える。　［伝達先］
　(c)　絵の才能に恵まれる。　［要素］
　(d)　太郎が社会人になった。　［結果］
　(e)　貴方にも一軒家が持てます。　［経験者］

(3)(a)　親友にノートを借りる。　［起点］
　(b)　余りの熱さに花子は気を失った。　［原因］
　(c)　先生に論文を批判される。　［動作者］
　(d)　３時に待ち合わせする。　［時間］

ここで３つのグループを作ったのは便宜上のものにすぎない。(１)(ａ)～(ｅ)の５つは空間次元の用法であり、本節の次段落以降で議論する。(２)(ａ)～(ｅ)の５つは非空間次元の用法であり、(１)の５つと並行的に整理できるとの見通しをもって第２節で議論する。また、(３)(ａ)～(ｃ)は奪格と交替する用法であり、(ｄ)は時間次元を含む用法であるが、このうち、本稿では(３)(ａ)と(ｂ)を第３節で取り上げることとし、紙幅の都合上、(３)(ｃ)と(ｄ)は割愛する。[2]

では、空間の用法を見てみたい。(１)で挙げた諸用法のうち、純粋に空間次元で用いられる意味には、静的な［存在点］を除いて次のようなものがある。

(４)(ａ)　針金を内側に曲げる。　［方向］
　(ｂ)　壁にボールを投げる。　［到着点］
　(ｃ)　壁にペンキを塗る。　［密着点］
　(ｄ)　調味料をスープに入れる。　［収斂先］

これらは見かけ上、何ら意味的な統一性がないようにも思われるが、変化主体（自動詞構造における主格ＮＰまたは他動詞構造における対格ＮＰ）が――程度差をもって――与格ＮＰに近づいていくという点で１つの軸の上に並べることが可能である。この分析に援用すべき概念として、山梨(1994ａ：106-108)が空間の「ニ格」について提案した《近接性》《到着性》《密着性》《収斂性》という４つの認知的制約がある。この４つは独立した要因というより、いわば“一体化”という１つの軸の上で程度差をもった連続体として考える方が実態にあっているように思われる。ここでいう“一体化”とは４つの制約を統括した上位概念であり、４つの制約は次のような階層をなしながら“一体化”の程度差を表す基準として再規定される：

《近接性》⟶《到着性》⟶《密着性》⟶《収斂性》

つまり、最も左の《近接性》が“一体化”の度合いも最も弱く、右に行くほど“一体化”の度合いが強くなるというものである。これを援用すると、上の例で、(ａ)における「針金」と「内側」の関係は、せいぜい「内側」に近づいているということでしかないわけだから最も“一体化”が弱く《近接性》を満たす程度のものとして位置づけられる。(ｂ)では「ボール」が「壁」に到着するというのがデフォルト的解釈であるから《到着性》に位置づけられ、(ｃ)では「ペンキ」が「壁」に到着した上に互いに切り離し得ない状態になるという点で《密着性》に位置づけられる。最後の(ｄ)では「調味料」と「スープ」が混ざり合って明瞭な区分がなくなるので、最も“一体化”の度合いが大きく《収斂性》を満たしているということができる。

このように記述して来ると、では、与格ＮＰは自動詞構造の主格ＮＰや他動詞構造の対格ＮＰとの関係において、どこまで“一体化”するのかという問いが当然予想される。この問いに対しては“動

詞の意味内容の範囲で、デフォルト的には可能な限り一体化する”というのが本稿での回答である。というのも、上の(4)(a)において「針金」と「内側」の関係を《近接性》というタームで記述したのは、動詞「曲げる」によって表される事象が《近接性》以上の“一体化”を可能にしないためにほかならない。同様に、(b)における「ボール」と「壁」の関係および(c)における「ペンキ」と「壁」の関係を、それぞれ《到着性》および《密着性》というタームで記述しているのも、それぞれの動詞「投げる」および「塗る」の表す事象において可能な限り“一体化”を進めた解釈である。言うまでもなく、ここでいう“一体化”の度合いに関する判断は、言語使用者の解釈を含んだものであり、(d)において「調味料」と「スープ」が《収斂性》を満たすのは、単に動詞「入れる」の語彙的な意味だけから導かれるものではなく、料理というスクリプトの中で「調味料」と「スープ」の関係に対する経験的な知識を踏まえて判断されることに留意されたい。

ただし、明確に付け加えておかなければならないのは、決して「ニ格」が4種類に分けられるのではなく、むしろ“一体化”という性質には程度差があって、4つの基準を援用すると意味役割が一元的に整理できるという点であり、この意味で4つの制約が便宜上の目安にすぎないことを確認しておきたい。

ところで、上述の分析は、先行研究の記述に訂正すべき点を指摘することにも貢献する。具体的には、田窪(1984：92)が述べているように、動詞「来る」や「行く」などを述語とする移動表現において［着点］が非場所名詞のとき［着点］を「ニ格」で標示できないというものであり、次のように例示される。

(5)(a)　花子が公園に来た。
　(b) ?? 花子が太郎に来た。
　(c)　花子が太郎のところに来た。

この例のように「来る」を述語とする動詞句内において、(a)が示すように［着点］が場所としての「公園」であれば「ニ格」で標示されるのが通常であるが、(b)のように［着点］が非場所名詞になると単純な「ニ格」形で標示することはできず、(c)のように「のところ」などを付与することによって場所性を形式的に保証する必要があるとされる。しかしながら、(b)の容認度が落ちることを単に「太郎」という名詞の場所性の問題に帰着させるのは適切でない。(b)が容認不可能になるのは「来る」という動詞が求める《到着性》を「花子」と「太郎」では満たし得ないという単純な理由によると考えればよいからである。実際、次の例が示すように、移動主体と着点NPが《到着性》を満たせば、［着点］NPが非場所名詞であっても「ニ格」で標示することができる。

(6)(a)　小さな虫がまた顔に来た。
　(b)　貴方にも手紙が行くはずです。

つまり、移動主体が「小さな虫」や「手紙」のように、相対的にサイズが小さく、人間の身体への《到着性》を満たすものであれば「ニ格」で標示することは十分に可能なのであって、これにより、単に「顔」や「貴方」といった名詞の場所性の問題ではないことが確認されると思われる。[3]

さて、ここで考慮に加えなければならないのが［存在点］であり、次の例からも分かるように、［存在点］は、見かけ上、位置変化(移動)を伴わない。

(7)(a)　玄関に一人の紳士が立っていた。
　　(b)　玄関で一人の紳士が立っていた。

このようなペアについては、森田(1989:760-761)が言うように、(7)(a)の「ニ格」が主格の「紳士」を「玄関」に位置づけるのに対して、(b)の「デ格」は「紳士」が「玄関」に所在することを前提に「立っている」という行為の方に重きが置かれるとの分析が妥当であろうと思われる。というのも、場所を「デ格」で標示したときは、主格ＮＰが場所ＮＰに所在することが常に前提とされるからである。実際、［場所］としての「玄関」を「デ格」で標示すると、例えば「紳士が玄関で寝ている / 話し始めた」のように、動詞の語彙的意味にかかわらず「紳士」が「玄関」にいるという関係は完全に保証される。これと対照的に、空間の「ニ格」では始めから所在することを前提とせず、事象の結果的側面において初めて主格ＮＰや対格ＮＰを“位置づける”という関係を伴う。[4]

実際［存在点］が“位置づける”という関係を伴うことは、次のようなペアにも反映される。

(8)(a)　敷地内に小型シェルターを作った。
　　(b)　敷地内で小型シェルターを作った。

(8)(a)のように「敷地内」を「ニ格」で標示したとき「小型シェルター」は「作る」という行為の最終局面において「敷地内」に位置づけられると解釈されるが、(b)のように「敷地内」を「デ格」で標示したときは「小型シェルター」の製作が「敷地内」で行われることを示すのみであって、そのまま「敷地内」に位置づけられるとの含意はない。

以上、本節では、空間の「ニ格」が“一体化”という１つの軸で一元的に把握されるとともに、［存在点］も移動主体が位置づけられることを確認した。

2. 非空間領域の多様性

第２節では「ニ格」の用法のうち非空間領域の用法を取り上げる。

前節で述べたように、空間次元においては移動主体が「ニ格」ＮＰとの間で《近接性》→《到着性》→《密着性》→《収斂性》という程度差をもって“一体化”する特質を示すが、非空間次元においても同様の一元化が可能であると思われる。具体的には、次の(9)(a)～(d)が示すように、自動

詞の主格ＮＰまたは他動詞の対格ＮＰと与格ＮＰとの間に“一体化”の関係と、その程度差が認められる。

(9)(a)　花子を食事に誘った。　［目的］
　(b)　上司に事情を話す。　［伝達先］
　(c)　会社が優秀な人材に富む。　［要素］
　(d)　液体が気体に変わる。　［結果］

(a)では比喩的に「花子」を「食事」に近づけているという点で《近接性》までしか満たさないが、(b)では「事情」が「上司」に到達するという点で《到達性》を満たし、(c)では「会社」と「人材」は不可分の関係にあるという点で《密着性》にまで達しているといってよい。また(d)においては「液体」と「気体」が同一の対象であるという点で《収斂性》を満たしているということができる。

もう少し具体的に見ていくと、４つのうち“一体化”の度合いが最も弱い《近接性》は、次のような用法の集合として捉えられる。

(10)(a)　太郎が父親に似て来た。
　(c)　花子が先輩に憧れる。
　(b)　信用回復に力を注ぐ。

(10)(a)～(c)は、従来それぞれ［基準］［志向先］［目的］のように異なる意味役割を与えられていたが、(a)および(b)のような自動詞構造の主格ＮＰであれ、(c)のような他動詞構造の対格ＮＰであれ、与格ＮＰに抽象的な接近が認められるという点で本質的に変わりない。すなわち、(10)(a)では容姿や仕草において主格の「太郎」が与格の「父親」に近づいているのであって、(b)でも主格ＮＰ「花子」の気持ちが「先輩」に近づいていっていると比喩的に解釈される。また、(c)では対格の「力」が「信用回復」に向けられており、この点で《近接性》という観点から一元化することが可能である。もはや、(10)(a)～(c)に異なる意味役割を与えることは皮相的な問題にすぎない。

第２の《到着性》を満たす例に次のようなものが観察される。

(11)(a)　会員に日程を伝えた / 連絡した。
　(b)　恩師に講演を頼んだ / 依頼した。

ここでは物理的には何ら位置変化を含んではいないものの、与格ＮＰは比喩的に移動主体の受け手として解釈される。これらの例が《到着性》を満たすといえるのは、デフォルト的に伝達内容ないし意向が、それぞれ「全員」や「恩師」に到達していると理解されるからである。

３番目に“一体化”の度合いが大きい《密着性》は、次のように例示される。

(12)(a)　全員が自信に満ちあふれる。

　　(b)　花子が感冒にかかっている。

ここで、与格を《密着性》という用語で特徴づけられることは、(a)および(b)における主格ＮＰと与格ＮＰの関係から自明であろうと思われる。

４つのうち“一体化”の度合いが最も大きいのは《収斂性》であるが、次の例が示すように、非空間次元においては主格ＮＰまたは対格ＮＰが与格ＮＰと実質的に同じ対象を指示するような関係が成立する。

(13)(a)　　隊員達が制服姿になった / 着替えた。

　　(b)　＊隊員達が制服姿に現れた / 整列した。

(13)(a)における「ニ格」の「制服姿」が「ガ格」の「隊員達」と《収斂性》を満たすというのは、両者が同一の対象を異なる側面から捉えたものであり、換言すれば「隊員達＝制服姿」の関係が成り立つという点で両者が指示対象において一つに収斂するとみなされるからである。このとき「隊員達＝制服姿」の関係は動詞「なった」や「着替えた」の表す事象を経て初めて成立することに注意されたい。というのも、(b)に挙げた「現れる」や「整列する」のように「隊員達」と「制服姿」の関係に影響を及ぼさない動詞とは共起し得ないからである。このように、補語の「制服姿」を「ニ格」で標示したときは、いわば〈－制服姿〉から〈＋制服姿〉への変化が起こっており、この点で、次のペアが示すように「デ格」と弁別的に機能する。

(14)(a)　＊隊員達が制服姿でなった / 着替えた。

　　(b)　　隊員達が制服姿で現れた / 整列した。

このペアのように、補語の「制服姿」を「デ格」で標示したとき、(a)が非文になるのは「隊員達＝制服姿」の関係が動詞「なる」や「着替える」の表す事象を通して変化を被らないからであり、逆に、(b)の容認度に問題ないことから、事象を通して「隊員達＝制服姿」の関係に変化が生じないことが確認される。この点で《収斂性》を充足するのに事象を通した変化を経なければならない与格と明確に差別化されるのである。

さらに「ニ格」の《収斂性》については、次の例が示すように、本来的には同定関係を成立させるような意味内容でない動詞が述語であっても、与格と対格との間で《収斂性》を充足することがある。

(15)(a)　　太郎が土産に香水を買った。

　　(b)　＊太郎が土産で香水を買った。

ここで、述語動詞「買う」は同定関係を成立させるような意味内容ではないが、(a)のように、下線部の「土産」を「ニ格」で標示すると対格ＮＰ「香水」の間で「香水≠土産」の関係から「香水＝土産」の関係が成立する。これに対し、(b)のように「土産」を「デ格」で標示すると「買う」という事象の前から「香水＝土産」の関係が成立していることになり、この解釈が経験的に不自然であるため非文と判断される。

最後に、次の例のような知覚文や能力文における「ニ格」ＮＰについて、国立国語研究所(1997:119-120)では［経験者］と呼んでいるが、広い意味での［存在点］と考えるというのが本稿の立場である。

(16)(a)　君に私の声が聞こえますか。

　　(b)　太郎に後任が務まるとは思えない。

これらの「ニ格」を［存在点］と分析するのは「知覚文」や「能力文」が広い意味で存在文として範疇化されるからであるが、その論拠については菅井(1993)を参照されたい。

かくして、山梨(1994a)のいう《到着性》《密着性》《収斂性》《近接性》を援用することで、第1節で挙げた(1)と(2)を次のように整理することができる。

スケール	空間次元	非空間次元
《近接性》	［方向］	［目的］
↓	↓	↓
《到着性》	［到着点］	［伝達先］
↓	↓	↓
《密着性》	［密着点］	［要素］
	［存在点］	［経験者］
↓	↓	↓
《収斂性》	［収斂先］	［結果］

ここで、［存在点］を［密着点］と同じところに置いたのは、移動という側面が前景化されないものの結果的な側面において［存在点］も［密着点］と同じように与格ＮＰに位置づけられるという特徴が認められるからである。また、［経験者］というのは知覚文や能力文における「ニ格」であるが、非空間次元で《密着性》を満たす用法として位置づけたのは、前述のように広い意味で［存在点］と同質のものとみなされるからである。

以上、本節では、非空間次元においても空間次元と同様に、《収斂性》《密着性》《到達性》《近接

性》を分類の基準とすることで、「ニ格」の大部分を単一の軸の上に整理できることを確認した。

3. 与格による起点標示

第3節では、第1節の(3)で挙げた諸用法のうち［起点］と［原因］について考察する。これら［起点］と［原因］の「ニ格」は対義関係にある「カラ格」と交替する点で特異なものである。

まず、広義の［起点］標示について、与格(ニ格)と奪格(カラ格)の交替は次のようなペアで例示される。

(17)(a)　花子が先輩に携帯電話を借りた。
　　(b)　花子が先輩から携帯電話を借りた。

「ニ格」と「カラ格」が対義的な概念として用いられることを考えると、両者が交替するのは奇妙なようにも思われるが、この現象に関しては、良く知られているように、すでに池上(1981:121-170)やIkegami(1987)によって、場所理論の立場から《起点<着点》の非対称性として論じられ、［起点］の与格は［着点］が一方向的に転用されたものと分析されている。[5]

この分析を援用し、主格ＮＰからのエネルギーと移動主体を黒丸・で、着点と起点を細円で表せば、格標示による移動主体と起点ないし着点の関係は次のように図示できる。

(18)(a)　［着点］の与格　——→⊙
　　(b)　［起点］の与格　←——⊙

　　(c)　［起点］の奪格　・←——○

いま、右向きの矢印を順方向、左向きを逆方向と呼ぶと、［着点］の与格は、主格ＮＰから着点ＮＰへの順方向的なエネルギー伝達が《到達性》を満たしていることを表し、［起点］の与格は、順方向的な着点ＮＰへの《到達性》を前提に、その［着点］を［起点］として逆方向に汎用したものというのが本稿の分析である。また、［起点］の奪格は、移動主体・が起点ＮＰ○から離れている関係を示し、順方向的な動きは何ら前提としない点で、与格標示と明確に区別される。重要なのは、［起点］の与格が［着点］の与格を前提にしているということであり、起点ＮＰが「ニ格」で標示されるときは、起点ＮＰに対する順方向的な働きかけが含まれているることを確認しておきたい。ここでいう順方向的な“働きかけ”というのは、主格ＮＰから起点ＮＰ(＝着点ＮＰ)へのエネルギー伝達であるから、具体的には〈申し込む〉ないしは〈求める〉という側面に相当する。[6]

この順方向的な側面を暫定的に“働きかけの局面”と呼び、逆方向的な移動主体（対格ＮＰ）の動き“受け取りの局面”と呼ぶと、［起点］の格標示に関する基本原則は次のように整理される：

(19)(A)　起点の「ニ格」標示は、起点ＮＰへの順方向的な“働きかけの局面”をプロファイルする。移動主体が起点を離れて移動するかどうかは問題にしない。

(B)　起点の「カラ格」標示は、起点ＮＰへの順方向的な“働きかけの局面”を含まない。逆方向的な“受け取りの局面”のみを範囲とし、移動主体が起点ＮＰから離れている関係をプロファイルする。

この原理を上の(17)に適用すると、(17)(a)のように「先輩」を「ニ格」で標示したときは、主格ＮＰ「花子」から「先輩」に「借りる」ことを求めたことが前提となっているのに対し、(b)のように「カラ格」で標示したときは「花子」が「先輩」に「借りる」ことを求めるという働きかけの側面が背景化され、結果的に「先輩」から「携帯電話」が一時的に移動していることが前景化されているということになる。

この交替現象に関連して問題になるのは、次のペアが示すように「ニ格」での標示に一定の制約が課せられるというものである。

(20)(a)　太郎が先生に本を借りた。

(b)　太郎が先生から本を借りた。

(21)(a) ??　太郎が図書館に本を借りた。

(b)　太郎が図書館から本を借りた。

このような２組のペアを根拠に、従来の客観主義的な分析は、下線部が［動作者］の意味役割を担うかどうかに「ニ格」標示の成否を帰着させてきた。実際、柴谷(1978:297-304)や杉本(1986:365-366)および Kabata and Rice(1997)によれば、問題のＮＰが与格で標示できるのは［起点］であると同時に［動作者］としても解釈可能なときであり、［起点］としてしか解釈できないときは奪格での標示のみが許されるという。この“動作者説”に従うと、(20)の例で「先生」が「ニ格」で標示できるのは「先生」が「本」の［起点］であると同時に［動作者］の意味役割を担うからであるのに対し、(21)の例で「図書館」が「ニ格」での標示が許されないのは「図書館」が［動作者］になれず［起点］としてしか解釈できないためということになる。しかしながら、従来の“動作者説”は妥当ではない。なぜなら、次の例が示すように、［起点］相当句を動作者として解釈することが同じように困難な名詞句でも「ニ格」での標示が許されるケースが観察されるからである。

(22)(a)　太郎が銀行 に 資金を借りた。

(b)　太郎が銀行から資金を借りた。

下線部の「銀行」は、［動作者］として解釈されづらいという点で上の例の「図書館」と変わりなく、［動作者］として解釈できるかどうかに関して両者を区別する理由はない。それにもかかわらず、(a)のように「銀行」が「ニ格」で標示され得るということは、下線部のＮＰが動作者としての解釈を持ち得るかどうかを「ニ格」標示の条件と考えることの誤りを示しているといえる。上の(19)に挙げた説明原理に従えば、下線部の格標示に対する説明は次の通りである：まず、(21)のペアにおいて下線部の「図書館」が「ニ格」で標示できないのは「図書館」が図書の閲覧・保管・貸し出しを役割とした公共機関であって、あえて「図書館」に“働きかけ”をする必要がないためであり、本稿の用語で言えば「図書館」への“働きかけ”をプロファイルすることが不自然であるためと説明される。同時に、(b)のように「カラ格」でなければならない理由も明白であり、そもそも「図書館」の「本」を「借りる」というとき「本」が「図書館」から離れ外部に持ち出されるという経験的事実に基づくものである。実際「図書館」の外部に「本」を持ち出さないとき「借りる」とは言わないであろう。他方、(22)のペアにおいて、(a)のように「銀行」が「ニ格」で標示され得るのは、経験的知識として「銀行」が民間の企業であって、融資を希望する側からの“働きかけ”を前景化できるためであり、(b)のように「カラ格」での標示も可能なのは“働きかけの局面”を背景化して「資金」が「銀行」から離れているものと解釈することも可能であるためということになる。

最後に、［原因］について簡単に触れておきたい。［原因］の「ニ格」も［起点］のケースと同じように「カラ格」と交替するが、［原因］ＮＰは自動詞構造における主格ＮＰとの関係に帰着される。具体的に、［原因］ＮＰが「ニ格」と「カラ格」で交替する現象として、次のような例が挙げられる。

(23)(a)　余りの暑さに多くの女性が倒れた。
　　(b)　余りの暑さから多くの女性が倒れた。

もちろん、両者には知的意味において明確な差異があり、山梨(1994b:109-110)によれば、(a)のような［原因］の「ニ格」には［着点］と同様の《収斂性》が働き、(b)のような「カラ格」は主格ＮＰに対して間接的に作用することが含意される。このことは、次のようなペアに反映する。

(24)(a) ?? 経済政策の失敗に内閣が倒れた。
　　(b)　経済政策の失敗から内閣が倒れた。

(25)(a)　大統領が弾丸に倒れた。
　　(b) ?? 大統領が弾丸から倒れた。

上の(24)のように、下線部の「経済政策の失敗」は間接的な原因であって、主格ＮＰ「内閣」と《密着性》も《収斂性》も満たさないので「ニ格」で標示することはできない。逆に、(25)のように、下線部の「弾丸」が主格ＮＰ「大統領」の体内に影響を与えるような《収斂性》が求められるようなケ

ースでは「ニ格」で標示しなければならない。[7]

以上、本節では奪格と交替する与格について考察し、［着点］の特質が継承される点で奪格と弁別的に差別化されることを確認した。

4. 結語

本稿は、現代日本語の「ニ格」を包括的に分析し、意味的な観点から弁別的に特徴づけるための議論を行った。本文で検討した「ニ格」の特性は次のように要約される：

［ｉ］　「ニ格」は、空間次元であれ非空間次元であれ自動詞の主格または他動詞の対格が与格ＮＰに“一体化”という軸において一元化され、同時に“一体化”の程度差において個別の意味役割が分化する。

［ii］　「ニ格」による［起点］は［着点］から汎用されたものであるから、［着点］の基本的含意を継承し「ニ格」へのエネルギー伝達を前提とする点で、移動主体との乖離を前景化する奪格と弁別的に区別される。

以上により「ニ格」の輪郭と全体の構成が意味的に把握されたと思われるが、関連現象を精巧に分析することによって、フィードバック的に本稿の記述に補正する必要が生じることもあるかもしれない。その可能性を含めて、本稿の記述を理論的に体系化し説明を与える作業は、稿を改めて進めることとしたい。

注

＊本稿は、日本認知言語学会設立記念大会（平成12年９月９日, 於:慶応義塾大学三田キャンパス）において同名の題目で発表した内容を文章化したものである。

[1] 例えば、国立国語研究所(1997:119-165)では延べ27の深層格(意味役割)を認めており、林(1992)と益岡・田窪(1987:4-5)では、各々15と11の用法を挙げている。

[2]「ニ格」全体の意味的な特徴づけについては、菅井(2000)を参照されたい。ただ、(3)(c)の［動作者］や(d)の［時間］については、菅井(2001)で補足した。また、本稿では考察対象を節の直接構成素としての「ニ格」に限定するので、例えば「１日に３回」のように全体で１つの副詞句ないし名詞句を構成する「ニ格」も考察対象から外しておく。

[3] 要するに、ＮＰが場所として認められるかは究極的に言語話者の解釈に帰着されるというのが本稿の立場である。荒川(1992：72)でも、移動主体によって場所性の解釈が異なる可能性に触れているが、一方で「お皿に蝿がいる」のような表現を容認不可能と判断しており、解釈の能力を過小に評価しているように思われる。

[4] ちなみに、柴谷(1978:282-285)は、場所ＮＰの格標示における「に」と「で」の使い分けについて、動詞が〈動的動詞〉のときには「で」で標示されるのに対し〈静的動詞〉のときには「に」で標示されると述べているが、(17)の例によって明確に反証される。

[5] 本稿では［着点］という用語を使って来なかったが、ここでは［着点］を第２節で触れた［方向］［到着点］［密着点］［収斂先］のカバータームとして用いることとする。

[6] 本節で援用している「エネルギー伝達」という考え方は Talmy(1985)によるものである。また、以下で用いる「前景化(highlighting)」「背景化(back-grounding)」についてはCruse(1986:53)を参照されたい。

[7] 山梨(1994ｂ)は［原因］の「ニ格」に《収斂性》を求めているが、本稿の枠組みでは《密着性》でも可能であるように思われる。なお、［原因］の「デ格」との関係については、菅井(1997:33-34)を参照されたい。

参考文献

荒川清秀　1992「日本語名詞のトコロ(空間)性――中国語との関連で――」大河内康憲(編)『日本語と中国語の対照研究論文集(上)』くろしお出版, pp. 71-94.

池上嘉彦　1981『〈する〉と〈なる〉の言語学』大修館書店.

国立国語研究所　1997『日本語における表層格と深層格の対応関係(国立国語研究所報告113)』三省堂.

柴谷方良　1978『日本語の分析』大修館書店.

杉本　武　1986「格助詞」奥津敬一郎・田沼善子・杉本　武(共著)『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社. pp. 227-380.

菅井三実　1993「構文スキーマ理論序説」『名古屋大学大学院文学研究科・人文科学研究』第22号, pp. 33-50.

――――　1997「格助詞『で』の意味特性に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集』127(文学43), pp. 23-40.

――――　2000「格助詞『に』の意味特性に関する覚書」『兵庫教育大学研究紀要』第20巻・第2分冊, pp. 13-24.

――――　2001「現代日本語の「ニ格」に関する補考」『兵庫教育大学研究紀要』第21巻・第2分冊.

田窪行則　1984「現代日本語の場所を表す名詞類について」『日本語・日本文化』第12号, pp. 89-117. 大阪外国語大学.

益岡隆志・田窪行則　1987『格助詞(日本語文法セルフ・マスターシリーズ)』くろしお出版.

森田良行　1989『基礎日本語辞典』角川書店.

山梨正明　1994a「日常言語の認知格モデル［2］――格解釈のゆらぎ」『言語』第23巻・第2号（1994年2月号), pp. 100-105.

――――　1994b「日常言語の認知格モデル［4］――認知的視点の投影と言語理解」『言語』第23巻・第4

号(1994年4月号), pp. 106-111.

林　璋　　1992「助詞の意義と用法の体系――格助詞『に』を中心に――」文化言語学編集委員会(編)『文化言語学――その提言と建設』三省堂, pp. 516-530.

Cruse, D.A.　　1986 ***Lexical Semantics*** (Cambridge Textbooks in Linguistics). Cambridge and New York : Cambridge University Press.

Ikegami, Y.　　1987 " 'Source' vs.'Goal' : a Case of Linguistic Dissymmetry," In Dirven, René and Günter Radden (eds.) ***Concepts of Case.*** Tübingen : Gunter Narr Verlag, pp.122-146.

Kabata, Kaori and Sally Rice

1997 "Japanese ***ni*** : the particulars of a somewhat contradictory particle," In Verspoor, M.H., *et al.* (eds.), ***Lexical and syntactical constructions and the construction of meaning*** (Current Issues in Linguistic Theory, 150). Amsterdam and Philadelphia : John Benjamins Publishing Company, pp.102-127.

Talmy, L.　　1985 " Force dynamics in language and thought," ***CLS***, 21, Part 2, pp.293-337.